

散

4

歩

ほの暗い蔵座敷の向こうに、
大正ロマン竹久夢二の面影が揺れる。

道



The Roman of Kitakata

佳人の面影

Yumeji Takahisa

大正ロマンの画家、竹久夢二が喜多方の笹屋旅館に滞在したのは、大正十年の秋と昭和五年の秋の二回である。夢二といえは、ほっそりとした姿態に大きな瞳、どこかほかなげな女性像、日本女性の美しさを追い求めた画家、そして詩人としても知られる。

多くの女性の憧れの的だった夢二にとって、モデルとしても、伴侶としてもかけがえのない女性であった「お葉さん」は、みちのく秋田の生まれ。隠やかな瀬戸内に生まれた夢二には、みちのくの厳しい風土、厚い人の情け、そしてたおやかな女人たちは、心ひかれる存在であったのだろう。雪深いみちのくの地を夢二は事あるごとに訪れている。

当時の笹屋旅館の主、岩田圭一郎は、旅館業のかたわら画商を兼ね、笹屋で画会を開き、絵画の展示即売を行っていた。そうした縁で笹屋旅館を訪れる画家も少なくなく、一世を風靡した竹久夢二もその一人であった。

喜多方に滞在中、夢二は好んで街を歩いたといわれる。笹屋旅館には、夢二の描いた作品が四点残されている。蔵造りの笹屋旅館は、当時そのままの姿で残っており、夢二の絵は、玄関奥の蔵座敷に展示されている。